大学地域連携プロジェクトにおける、企画者と参加者の視点の変化
Facilitators and Participants' Viewpoint Shifts in University/Community Collaboration Projects

宮田義郎、八木希美、岡西康太
Yoshiro Miyata, Nozomi Yagi, Kouta Okanishi

中京大学
Chukyo University
miyata@sist.chukyo-u.ac.jp

Abstract

We analyzed records of communication between student staffs and people in the local community participating in a cross-generational collaboration project. While the participants shifted towards "design" viewpoints, students developed more individual purposes for the projects.

Keywords — Cross-generational collaboration, Community of learners, Viewpoint shift

1. 大学地域連携プロジェクト

中京大学宮田研究室では、地域の自治体や児童センターと連携し､外国籍の人も含む地域の大人、子どもと、大学生のコラボレーションによる複数のプロジェクトを数年間継続してきた。その一つ「保見プロジェクト」では、毎年９月から１１月にかけて数回のワークショップを開催している。初年度 2006 年には、地域の団塊世代の人達と大学生が町について話し合い、いくつかのテーマに沿って調べた資料や撮影した写真を使い、地域の大きなマップを作成した。2 年目の 2007 年には、子どもも参加者に加わり、クリケット（MIT Media Lab で開発された、小型コンピュータ。レゴブロックに組み込め、センサーや LED などを接続できる。）を組み込んだ、大きな町の立体模型（ジオラマ）を制作した（図１）。

図１　三世代で制作した未来の町のジオラマ

2008 年にはさらに外国籍の参加者も加わり、「町と地球をつなぐ」というテーマで、クリケットを組み込んだ地球の大きな模型を制作した。

2. 参加者と企画者の視点の変化

これらのワークショップは、通常は出会うことのないような異文化、異年齢の企画者と参加者達にとっては、いわば非日常的な場である。その中での学びが彼らの日常につながる意味のあるものになるような場として、継続していくことを考慮して「創発的活動のマトリクス（Miyata & Ueda, 2006）」によりデザインしている。このような異文化、異年齢の、日常につながる学びのコミュニティーが形成されていくプロセスを明らかにするために、「サポートレベル」（[1]）の観点から、企画者と参加者がそれぞれどのような視点でプロジェクトに関わっているのか、その視点がどのように変化していたか、に注目して分析した。

3. 大人参加者の視点変化

１つ目の分析では、2007 年の大人参加者について分析を行った。（[2]）2006 年の参加者の何人かが、2007 年のワークショップ開始前から研究室での企画段階に参加した結果､「前半は学生と大人参加者が場を準備し、後半で子ども達が参加する」という構成になっていった。大人参加者と学生が協力してジオラマの土台を作り、子ども参加者はその土台の上に「未来の町」を作っていった。その過程で、大人参加者は次第に企画者としての視点を持って場に関わるようになっていったようだ。

その過程を詳しく調べるために、これらの大人参加者に毎回終了後に記入してもらったアンケート回答､ワークショップ中に撮影したビデオ映像、写真などのデータを分析した。団塊世代の参加者

３名に注目し、３名それぞれの言動が、①誰を視野に入れたものか、②「場をつくる」視点を持っていたかを調べた。その結果、前半は、「学生さんの配慮に感心した」「学生さんの意見をききたい」など、主に自分と学生との関係に視点があり、場をつくる発言は少なかった。後半では視点が次第に子ども達に向けられて視野が広がると同時に、「子どもに…をやらせたい」など「子どもの活動のデザイン」、「…すると気持ちがやわらぐかも知れない」など「子どもが参加しやすいデザイン」についてなどの、場をつくる発言が徐々に増加し、子ども達をサポートしていこうという意識が強まっていたようだ。また、３人の関わり方にはそれぞれ特徴があり、「子どもたちの夢が形つくれるようにサポートしたい」など、各人が次第によりパーソナルな意味を持ってその場に関わっていったことがわかった。

4. 企画者の視点変化

２つ目の分析では、企画者側である学生の視点の変化について、2008 年のプロジェクトの中でのリフレクションの記録を元に、分析を行った。プロジェクト初期のリフレクションでは、プロジェクト全体の目的に関する内容がほとんどで、個人個人がその場に関わる目的が明確に外化されていなかった。それが結果としてモチベーションの低下や、チームの不活性化につながっているのではないかと思われた。

そこでそれらの問題のいくつかを解決する目的で、新たなリフレクションをデザインして、実践した。([3]) このリフレクションでは発散と収束を軸とした５つのフェーズをデザインした。まず、前半では経験の外化と共有の２フェーズであり、主に個人個人の視点からみたプロジェクトの経験の全員での共有を行った。後半は、経験のまとめ、質問応答、目的の明確化、という３フェーズの構成で、前半のリフレクション結果にもとづいて個人個人が、自分がプロジェクトに関わる目的についてリフレクションした。

実際に３回生８名でこのリフレクションを行ったところ、６名のメンバーの発言に以下の変化があった。フェーズ３に比較してフェーズ５の発言は、よりメタ的で、より客観的な視点から、自分の関わり方を観ていた。例えば「スムーズに進めたい」「余分な事を減らしたい」（フェーズ３）が、「他人任せにせず自分が行動する」（フェーズ５）に変化した。また、また「他人に興味あり」（フェーズ３）が「他者を理解しながら育てていく環境をつくる」（フェーズ５）に変化など、プロジェクトに関わる自分の目的がより明確に外化されていた。さらに、このような変化は、第４フェーズでの相互の質疑応答の中でおこっていたことが分かった。

5. 考察

企画者と参加者のこのような視野の広がりと、プロジェクトに関わる視点の明確化とが、プロジェクトの活性化につながっているのか、ワークショップ外の活動に活かされているのかは、さらに観察・分析する必要がある。このようなデザインのリフレクションを継続的に行う事で、よりメタ的な視点、客観的な視点から、自分とプロジェクトの関わりを見つめ直し、自分にとっての意味をさらに深めることで、日常に活かしていける可能性がある。

謝辞

本研究は科研費課題番号 19330197「異文化理解・多文化共生の可能性を探る身体・メディア活用型プロジェクトの開発と評価」の支援を受けた。

参考文献

[1] Miyata & Ueda, 2006, Playshop as Space for Emergent Learning, Proceedings of The 7th International Conference on Learning Sciences, Indiana.

[2] 八木、2008, 多世代からなる継続的なワークショップにおける「参加者から企画者」への視点の変化、中京大学卒業論文

[3] 岡西、2009、自己発見からのコミュニケーションの活性化を促すリフレクションのデザイン、中京大学卒業論文